

第1章 協働の時代背景

最近「市民協働」や「協働のまちづくり」という言葉をよく聞くようになりました。そもそも「協働」とはどのようなことなのでしょう。なぜ協働が必要なのでしょう。まずは、協働が必要となった時代背景を考えてみましょう。

1 なぜ協働なのか

(1) 個性ある地域をつくるために

大都市名古屋の近郊にありながら、自然に恵まれ、文化を運ぶ交通の要衝として発展してきた豊明市を、今後はどのような地域にしていきたいですか。

地域には各々の事情や特性があり、国が主導する画一的なまちづくりではなく、市民の一番近いところで、地域の特性を活かしたまちづくりが重要視されるようになってきました。これが「地方分権」が目指される理由です。

「高齢化や防犯・防災、子育て等の課題に対して、どんな力を結集して解決していくのか」また、「歴史遺産、自然、伝統文化等、まちのどんな魅力を高めていくのか」。こうした時に、地域のことを一番よく知っている市民が主役になって考え、市民と行政が協力しあって取り組んでいくことが進んでいけば、個性と活力ある地域づくりと、地域を誇りに思える気持ちにつながっていきます。

(2) ゆたかに暮らせる地域をつくるために

今、時代は大きく変化しています。市民のライフスタイルや価値観の多様化が進み、行政による公平で均質的な公共サービスでは対応できないニーズが増えてきました。一方で、子育てや高齢者のケア等について、地域や家庭のあり方が変容し担いきれなくなり、公共サービスとして支えることも必要になってきています。

しかし、少子高齢社会となり厳しい財政状況が予想される中、今後も増えていくさまざまな社会ニーズに対して、全てを行政サービスで対応することには限界があります。効率的なサービス提供のあり方を追求すると共に、地域のさまざまな力が公共サービスを補いあうことが必要になります。

地縁組織・NPO等市民活動団体・企業等の特性を組み合わせ公共サービスを支えることは、豊明市が目指している「一人ひとりの幸せ」を追求する利用者本位のサービスを創造する可能性にもつながり、わたしたちがゆたかに暮らせる地域をつくる力にもなっていくのです。

(3) 助けあいの地域をつくるために

子どもの安全、高齢者の一人暮らし、災害時の救出等、わたしたちの生活の中には、自分一人の努力だけでは解決できない問題も多くあります。「子どもを地域で見守る気持ちがある」「災害時に近所が助けにきてくれる関係がある」といった「ご近所の底力」がこれまで以上に問われる社会になりました。豊明市では区・町内会等の地縁組織が比較的活発ですが、一人ひとりが小さな力を出し合って地域をよくしようとする気持ちや行動が育まれる基盤として今後も守り育んでいくことが必要です。

他方で、青少年のひきこもり、外国人の増加等、新しい社会の課題に対しては、特定の課題を解決しようという志をもって活動するNPO等市民活動団体が注目されます。こうした団体が豊明市のまちづくりにより貢献できるように、活動を支援する仕組みや、行政と団体が協力しあって取りくむ動きをつくっていくことが重要です。

また、子育てや高齢者福祉等、区・町内会と、NPO等市民活動団体との協力が必要な場面も増えてきており、両者の力を活かしあうことで、助けあいの地域力をより高めていくことができます。

(4) ふれあい豊かな地域をつくるために

助けあいや地域の問題を解決しようという源になるのは、周囲の人々を思いやり、自分が役に立ちたいという気持ちです。しかし残念ながら、昨今は隣人に対し無関心の人が増えていきます。他方で、自分の力を発揮したり、仲間づくりをするきっかけがつかめず地域で孤立する人も少なくありません。人と人の絆の大切さと、それに喜びを感じる心を改めて取り戻していく時期にきているのかもしれない。

心の絆や思いやりは、一朝一夕ではなく、身近に人と交流する機会があり、その体験が積み重なるようにして醸成されていきます。昔のお祭りや農作業のように、世代を超えて体験や時間を共有するような機会を、私たちはもう一度、今の時代にあった形でつくる必要があるになってきているのではないのでしょうか。

お年よりと子育て中の親子が同じ場に集い、そこで料理の腕をふるまう人がいる…そんな何気ない交流に市民が楽しみながら関わる機会が生まれてくれば、まわりの人々の幸せを願いあうふれあい豊かな地域になっていくことでしょう。

2 新しいまちづくりの考え方「協働」

(1) 協働とは何か

協働とは、「よりよい地域社会にするため、さまざまな人々や組織がお互いの特性を活かしながら、『地域の課題を解決する』『よりよい公共サービスを提供する』という共通の目的のために、共に考え、協力しながら取り組んでいくこと」を意味するものとして用います。

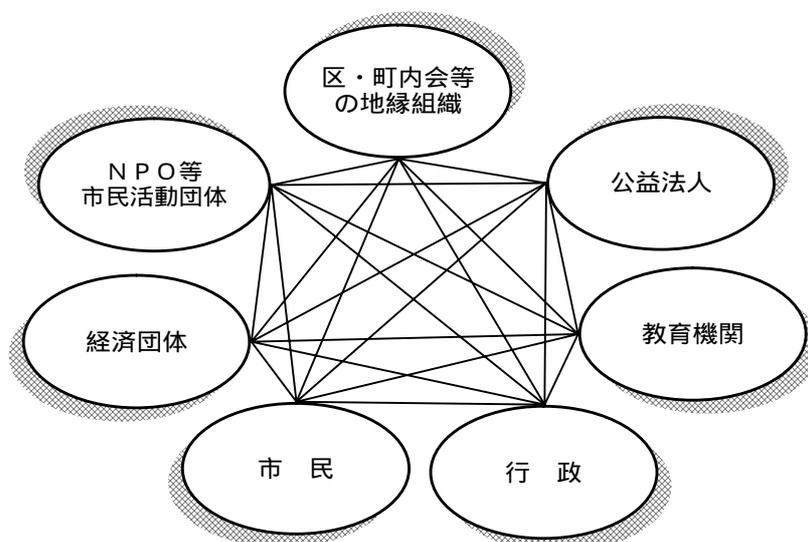
協働の基本になっているのは、「市民みんなに関わる問題（＝公共）について、行政だけが担うのではなく、市民、地縁組織、NPO等市民活動団体等が力を出し合って、担っていきこう」という考え方です。つまり、各々がもっている知恵、資金、情報、人材等を地域の課題を解決するために提供し、責任・役割を分担して取り組んでいきこうということです。

(2) 誰が協働するのか ～さまざまな人や組織が参加します～

協働には、市民、区・町内会等の地縁団体、NPO等市民活動団体、企業、大学・学校、公益法人等、行政などさまざまな人々や組織が関わっていくことが重要です。それらはさまざまな知恵や経験を持ち、豊明市のまちづくりを支えているからです。

「地縁団体と大学で協力して子育て支援活動を始める」、「行政とNPOと商店街で地域の活性化に取り組む」といった、各々の特性・力が多様に結びつき、協働が実践されることで、行政に公共サービスを任せる形から、市民のニーズに柔軟に応えるサービスを提供する役割を各々が自ら担い、一緒にまちづくりを進めていくことが可能になります。

図1 さまざまな人・組織の参加と協力



協働に関わる「さまざまな市民」

地縁組織	区・町内会、子ども会、老人会、婦人会、PTA等、ある地域で生活することを縁とし、包括的な生活場面を通してつながりを持つ組織
市民活動団体	特定非営利活動法人（NPO法人）、法人格を持たない非営利活動を行う任意団体（市民活動団体、ボランティア団体、文化芸術活動やスポーツ活動を行う団体）等、特定のテーマに対する共感によってつながりを持つ組織。
経済団体	企業、商店街、発展会等
教育機関	学校、大学等
公益法人	社団法人、財団法人、社会福祉法人等
市民	市内に住んでいる人をはじめ、通勤・通学している人、市内で社会・経済的な活動をしている人

(3) みんなでつくる「新しい公共」

「市民みんなに関わる問題（＝公共）を、市民、地縁組織、市民活動団体等さまざまな組織が担っていく」という考え方は、今までの公共（＝行政が担うもの）の考え方とは区別して、「新しい公共」と呼んでいます。

「新しい」といっても、実際は、地域には色々な課題に対して、まず自分自身や家族で解決を図り、それでも解決できない場合は順次みんなの力で補っていきこうという、助けあいの精神がありました。従って、全く新しいものをゼロからつくるのではなく、核家族化や都市化の中で希薄化していた「助けあい」を現代社会に適した形に再生していく試みでもあります。今日の地域での多様な不安・不満を解きほぐすために、市民やさまざまな組織が参加し、力を合わせて難問解決していく地域自治の姿として「新しい公共」が必要になってきているのです。

豊明市では、多様な価値観を持つ一人ひとりの市民のしあわせを実現するためには、柔軟性・思いやり・創造性を発揮した多様で豊かな公共サービスを創り出す必要があること、また、こうしたサービスを創り出す活動に市民自らが参加していくことが、生きがいに結びつき、イキイキした地域を創り出す力になるという考えから、「新しい公共」の考え方に基づいて、協働のまちづくりを進めていきます。

(4) 目的とお互いの特性に即した役割の担い方

協働は、それ自体が目的ではなく、「よりよいサービスを提供するための手法の一つ」です。公共サービスの中には、市が単独で行う必要があるもの、市民が独自に行った方が効果的なもの、協力して行うことでよりよいサービスが行えるものがあります。各々が持つ特性が活かされ最もよい成果が生まれるように、協働の担い方を検討していくことが必要です。

図2 市民(地縁組織・市民活動団体)と行政の役割分担

